

安全、安心な高信頼社会をめざす私の提言

廣瀬 英雄

1. 何が起って、何が起らなかったのか

3月11日金曜日。いつものように研究室で仕事をしていると、東京の息子から午後4時前にたった一行のmailが舞い込んできた。「かなり揺れたが大丈夫」。こんな時間にわざわざこういう連絡するのは変だなと思い、すぐに携帯で確認をとろうとしたがつながらない。たまたまUstreamを見つけたのでそれを観ると津波の映像が流れていて、ただ事ではないことが理解できた。しかし、後から聞くと、mailをくれた息子がさえもそのときの東北の被災地の全体状況は分かっていなかったようだ。ちょうど私がサンフランシスコ大地震を経験したときと同じように、当の被災地では状況は分からず日本からのニュースの映像で初めて全体像が分かったように。そして、ほんの200km程度の遠方で何が起っているのかを知らないまま、東京で働く通勤者は真夜中まで静かに自宅に向かって行進した。その姿に、世界からは沈着冷静な日本人ということで賞賛さえされた。

翌日から世界の目は福島原発に集まった。水蒸気爆発などが立て続けに起こったからである。しかし、日本国内での情報は抑制されているように見えた。衝撃的な爆発時の映像はほとんど海外から発信されたものであったし、インターネットに流された放射能拡散のシミュレーション動画も海外からのものであった。世界的に高精度の天気予報を提供できる高い科学技術力を持つ気象庁からもそのようなシミュレーション動画はすぐには公開されていない。気象学会理事長は、3月18日に「信頼できる単一の情報」のみが提供されるべきだとして、学会員に情報発信の自粛を促していたことが分かったが、このことから、あちこちでこのような考え方に従って情報が発信されていなかったのではないかと推察

される。

テレビでは、初め、「直ちに影響をおよぼすものではない」と政治家も企業人も学者もひたすら連呼していた。そのことを信じて落ち着いた行動をとった市民も多い。しかし、日数が経つにつれ、全く安全であったはずの原子炉では放射能が漏れていたことが報道され、正確な情報が少しずつ明らかになってきた。

意図したとおり、突発的なパニックは起こらなかった。しかし、事体が段々と明らかになるにつれ、ある程度情報がコントロールされていたのではないかという疑念があちこちで湧いているのではないかと感じる。パニックを恐れるあまり、情報が積極的に発信されなかったのではないだろうか。それで果たして良かったのか。

2. 情報はすべて発信されるべきか

情報を持つ者は、その情報を隠し持つ部分と発信する部分とを使い分けることによって、情報が影響を及ぼす世界を支配することができる。情報が特定の組織内に閉じていれば、その組織の中で重要な情報を持つ少数がその組織を動かすことができるわけである。これは、どのような組織でも同じである。例えば、これまで、大学は知の蓄積を行ってきたが、そこでは知へのアクセス手段を多く持った者が、その分野をある程度把握できていた。つい最近まで、研究室、研究グループ、図書館などは、情報を物理的に閉じた空間に押し込めることができていた。

しかし、インターネットが社会機能の中核になるうとしている時代、情報を特定の範囲で閉じて使うことは困難になってきている。これまで、テレビや新聞などのメディアは有用な情報を精選して一方から流すことができたため、ある程度の情報のコン

トロールは可能であったが、情報が双方向になった現代、もはやそれは不可能になりつつある。

twitterはその代表格であろう。これまで、限られた人的ネットワークの中でしか情報のやりとりができなかった人たちが、世界中の不特定多数の人々と、これまで普通には手に入らない貴重な情報をやり取りすることができる。そういう世界が存在する。twitterは先の東北大震災での情報のやりとりに重要な役割を果たしただけでなく、これまで即座には知り得ないような情報（例えば、放射線を物理的、医学的な見方で正しく捉えること）を多くの人に与えてきた。ただ、情報はいつも貴重であるとは限らず屑のような情報も多い。しかし、多くの玉石が混交の状態を提供されていることこそが重要なのである。与えられる情報から（考えないで）知識を得るのではなく、何が正しいか、何が正しくないか、常に自分の目を鍛え上げながら情報の価値を判断していかなければならない。そのステップこそが市民を賢くする。そして、ますます磨き上げられた情報が流通するようになる。

twitterは、合意の上の情報のやりとりであるが、一方、壁を設けていても、コンピュータ上の情報の性格上、セキュリティの壁をいくら高くしても、アクセスするためのキーが存在する限り壁が破られることがある。そういう意味からも、もはや情報を持てる者だけが情報をコントロールできる時代ではなくなっている。

3. 情報を正しく理解し、正しく伝え、批判的に見る

たまたまハーバード大学の一般教育修了者に求められる能力 [1] を見ていたら、今の時代に求められていることがまさに明確に書かれていることに気がついた。そこには、

知識・理解：正確に理解することができる

技能・表現：正確に意思の疎通を図ることができる

思考・判断：明晰かつ批判的に思考することができる

と書かれている。

先に述べたように、情報は精選されて与えられる時代から、玉石混濁状態の情報から価値のある情報を自ら探し出す能力が重要な時代に入ったのである。そのためには、まず情報を正しく理解しなくて

はならない。それは正確に伝えられなければならない。そして、その情報を批判的に見て自分で判断しなければならない。市民は、このような判断力を持って、自ら行動すべき指針を自ら決定し、安全・安心を担保するのである。与えられる安全・安心ではなく、自らが築き上げる安全・安心。このことが、情報化がますます加速される社会で重要な共通認識となるであろうと考えている。

4. 安全・安心への提言

教員として学生と交流していると気がつくことがある。それは学生の計り知れない能力である。学生は稚拙な知識で幼稚なことしか考える能力がない、と思うのは大変な誤認識である。研究室で切磋琢磨する中で、学生は自由奔放なアイデアを思いつき、一気に形にしていく。学生の個性それぞれが生きてくると、研究室全体は一教授の知識の範囲を大きく超えてしまう。市民も同様であると思う。一人一人に正確な情報が伝えられ、自ら考えて判断できる能力が段々と備わると、一部の選ばれた専門家だけで判断するよりも、より良い道筋が得られると考える。

これまで、安全・安心は、専門家がその枠を作り、その範囲内で工学的にもものづくりを行うことで守られてきていた。それは規格であり、基準であった。それを守ることで責任の境界が明確にはなる。ただそれは、せいぜい過去数百年とか、そのような時間の長さでしか作られてきていない。しかし、災害は人の一生の時間的な想像の範囲で襲ってくるわけではない。自然は容赦しないのである。そのようなときどうするかが今求められている安全・安心なのではないだろうか。基準は必要である。しかし、盲目的に基準に従っていればいいということではなく、基準はどのようなものであるかという背景は正確に知っておく必要があるということである。

そのためには、一人一人が、正確で価値のある情報に容易にアクセスでき、その内容を自ら（批判的に）考え、近くの人に正確に伝えられるようであればならない。つまり、

- 1) 誰でも、どのような情報でも、自由にアクセスできる環境の中で、
- 2) 情報は、どこからも批判的に見られながら、より正確で貴重なものに磨かれ、

- 3) その正確な情報により，正確な将来予測を行い，
最適な道筋を選ぶ，

ことができることこそ，次世代の安全・安心の基礎
であると考え，そのような社会形成を目指すことを
提言したい。外の目を気にした見せかけのパニック
防止策ではなく，市民自らがパニックを起こさない
ような智慧を形成させる社会環境を作り出すことが
肝要ではないだろうか。

参考文献

- [1] 沖裕貴，観点別教育目標から考えるカリキュラ
ム・ポリシーの構造，立命館高等教育研究第7
号，pp.61-74 (2007)

(ひろせ ひでお／九州工業大学)